月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.58



狙われた伝説のドリル! 犯人は誰だ!?
みんな集まれ! ファルコム学園

ノルドで過ごす穏やかな夜、そして……
英雄伝説 閃の軌跡

発売直前の単行本情報も要チェック!
『英雄伝説 閃の軌跡 メンタルクロスリンク』お試し読み第二弾!

エステル＆ヨシュアのファルコム空の軌跡ラジオの舞台裏

ファルコムニュース

いよいよ発売直前! みんな、行くわよ!

「英雄伝説 空の軌跡 SC Evolution」特集



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説 空の軌跡SC Evolution

THE LEGEND OF HEROES 空の軌跡SC Evolution ソラノキセキSC エヴォリューション

●製品情報

英雄伝説 空の軌跡 SC Evolution

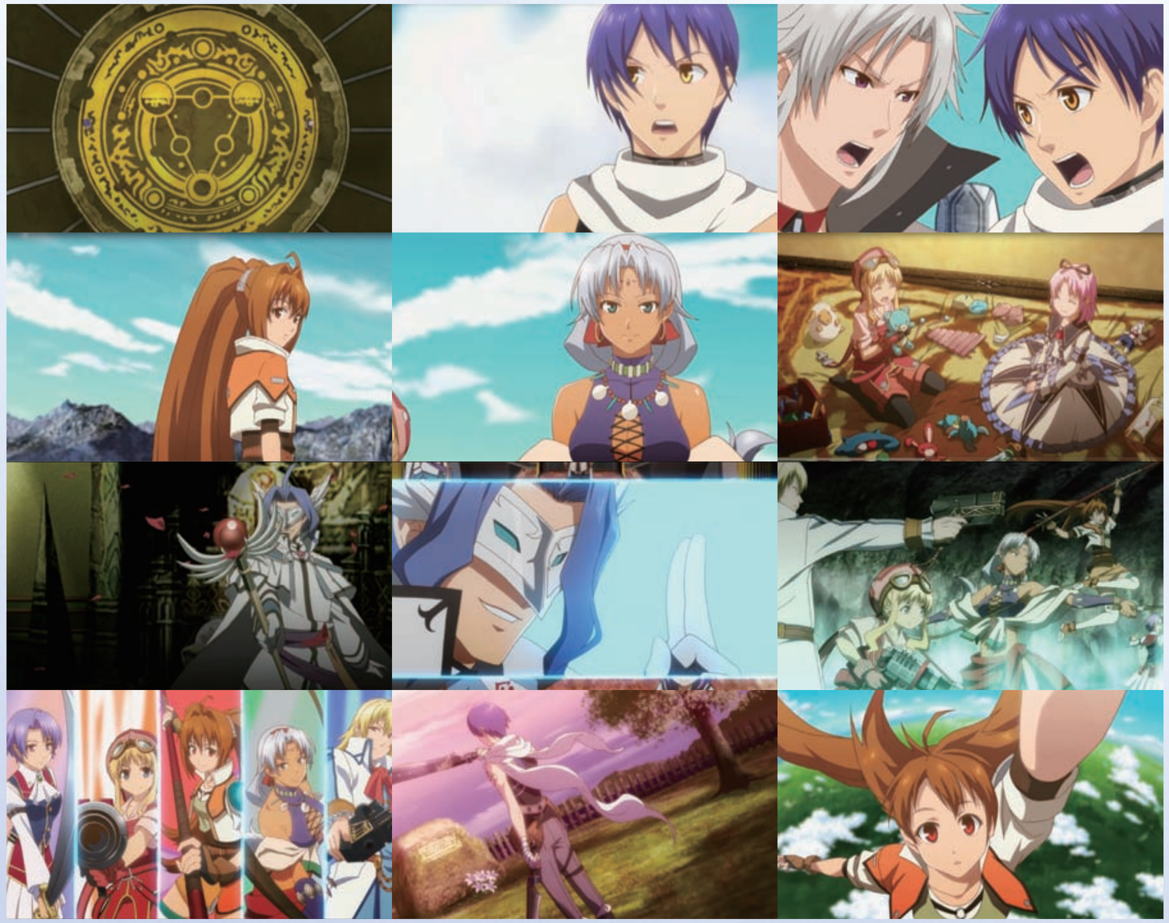
対応機種：	PlayStation®Vita
ジャンル：	ストーリー RPG
プレイ人数：	1人
Vita TV：	対応
発売予定：	2015年12月10日
価格：通常版：	5,800円（税別）
DL版：	4,800円（税別）
限定版：	8,300円（税別）
キャラアニ限定BOX：	9,800円（税別）
CERO：C	
発売：	株式会社角川ゲームス
原作・音楽：	日本ファルコム株式会社
企画・監修：	株式会社キャラアニ、日本ファルコム株式会社

ついに発売！　めくるめく『空の軌跡SC Evolution』の世界を楽しもう!!

いよいよ発売まであと10日あまりとなった『空 SC Evo』。
今回はその世界を、ヴィジュアルを中心に紹介していくぞ。

注目のオープニングカットを一挙紹介！

『軌跡Evo』シリーズといえば、フルアニメーション化したオープニング。ゼムリア大陸の影で暗躍する結社《身喰らう蛇》のメンバーも登場し、ますますダイナミックになった映像に注目してみよう。



体験版も好評配信中！　序章の気になる内容は？

衝撃のラストで幕を下ろした前作。その直後から今作はスタートとなる。その幕開けとなる序章のカットを少しだけご紹介。序章がまるまる楽しめる体験版も配信中なので、発売までにしっかりとプレイしておこう。

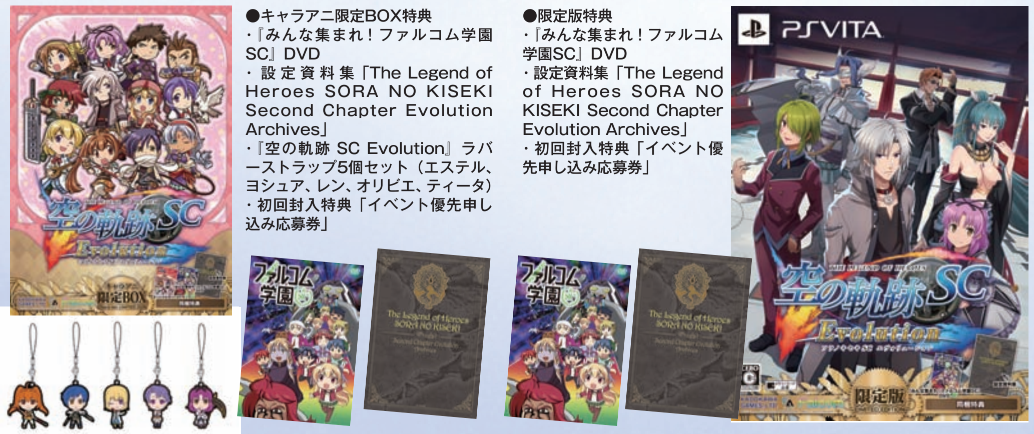


今回も豪華特典満載！　商品情報も要チェック！

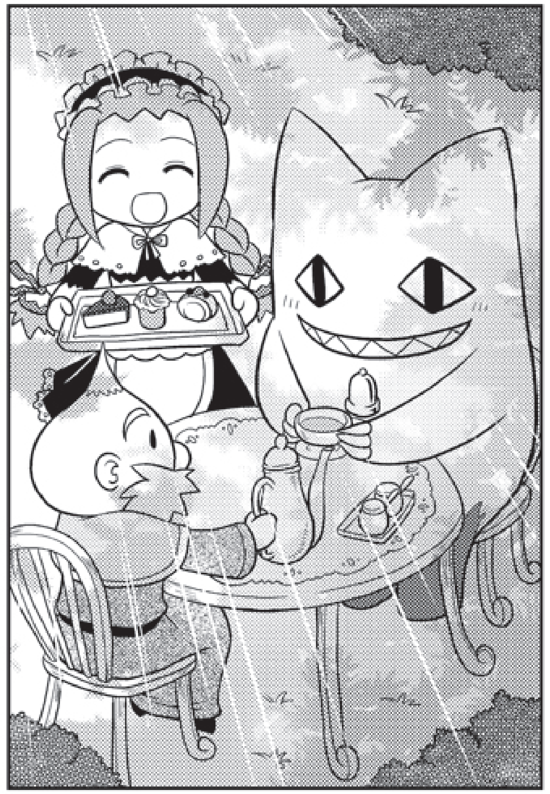
『軌跡Evo』シリーズといえば、豪華特典が満載の限定版も見逃せない。今回も前作と同じく、通常版、ダウンロード版、限定版、キャラアニ限定BOXが発売予定だ。それぞれの商品情報をチェックしてみよう。

●キャラアニ限定BOX特典
・『みんな集まれ！ファルコム学園SC』DVD
・設定資料集「The Legend of Heroes SORA NO KISEKI Second Chapter Evolution Archives」
・『空の軌跡 SC Evolution』ラバーストラップ5個セット（エステル、ヨシュア、レン、オリビエ、ティータ）
・初回封入特典「イベント優先申し込み応募券」

●限定版特典
・『みんな集まれ！ファルコム学園SC』DVD
・設定資料集「The Legend of Heroes SORA NO KISEKI Second Chapter Evolution Archives」
・初回封入特典「イベント優先申し込み応募券」



『英雄伝説 空の軌跡 SC Evolution』公式ホームページ　http://www.sora-evo-sc.com/



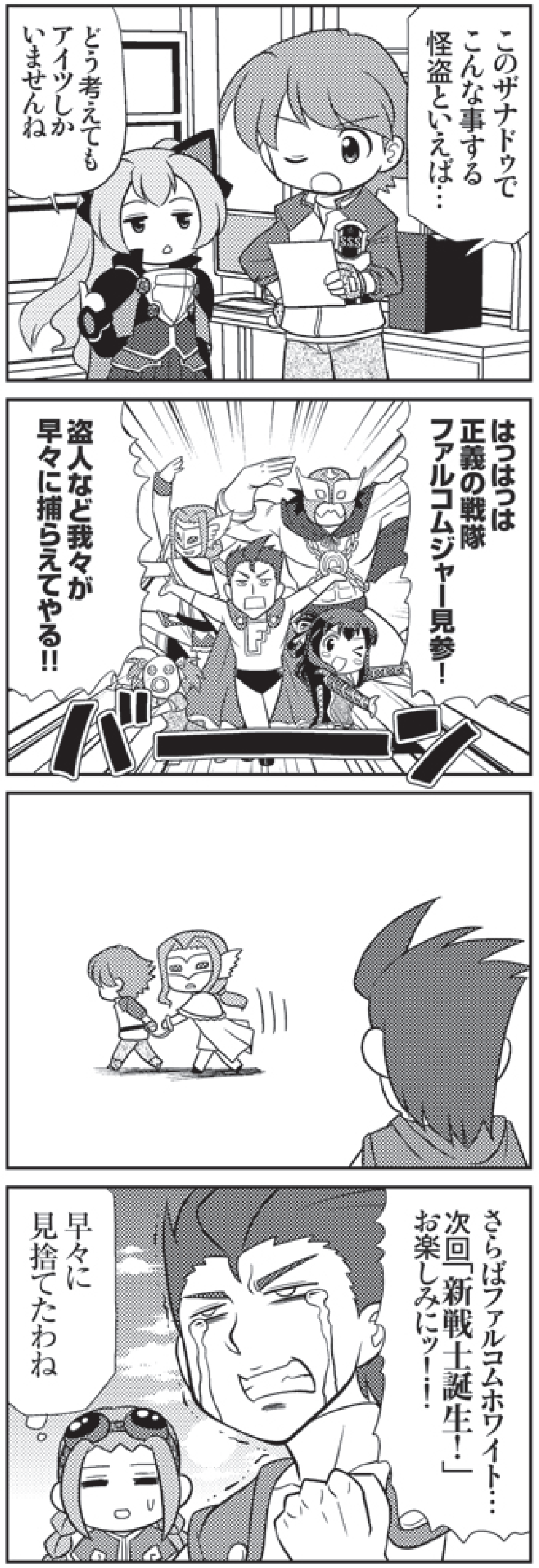
みんな集まれ! ファルコム学園

新久保だいすけ

いただきます



大体アイツのせい



路線変更



ドリルの隠し場所



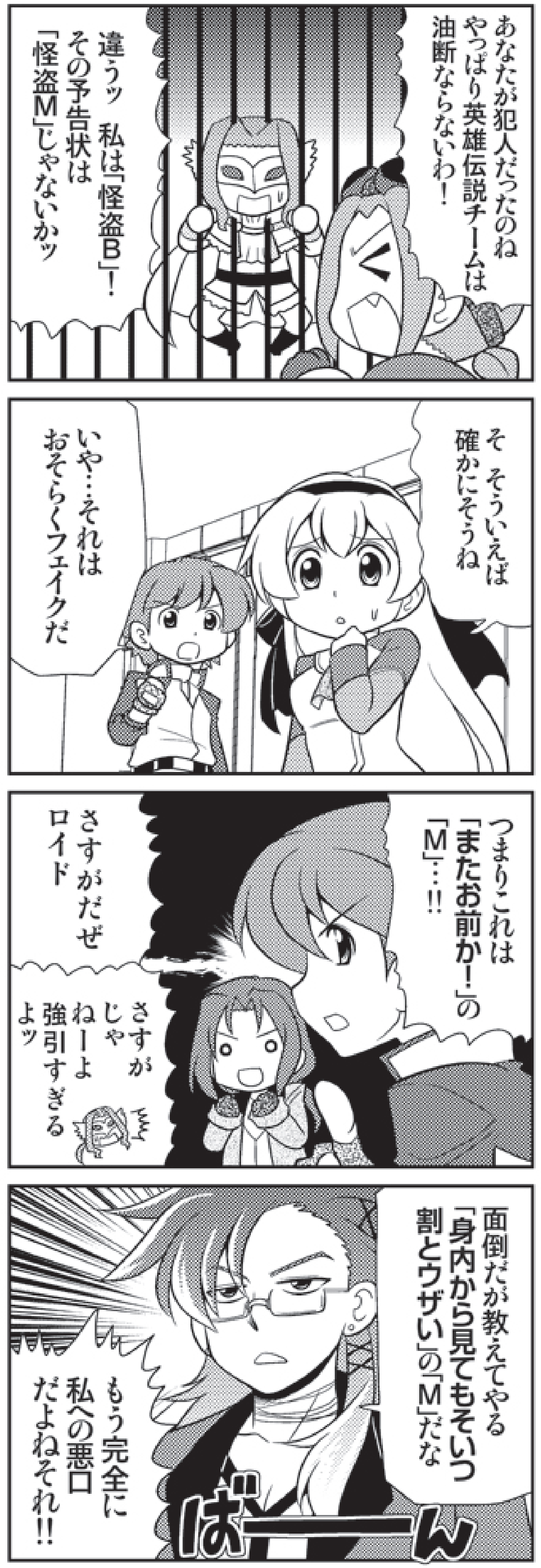
ふたりの関係



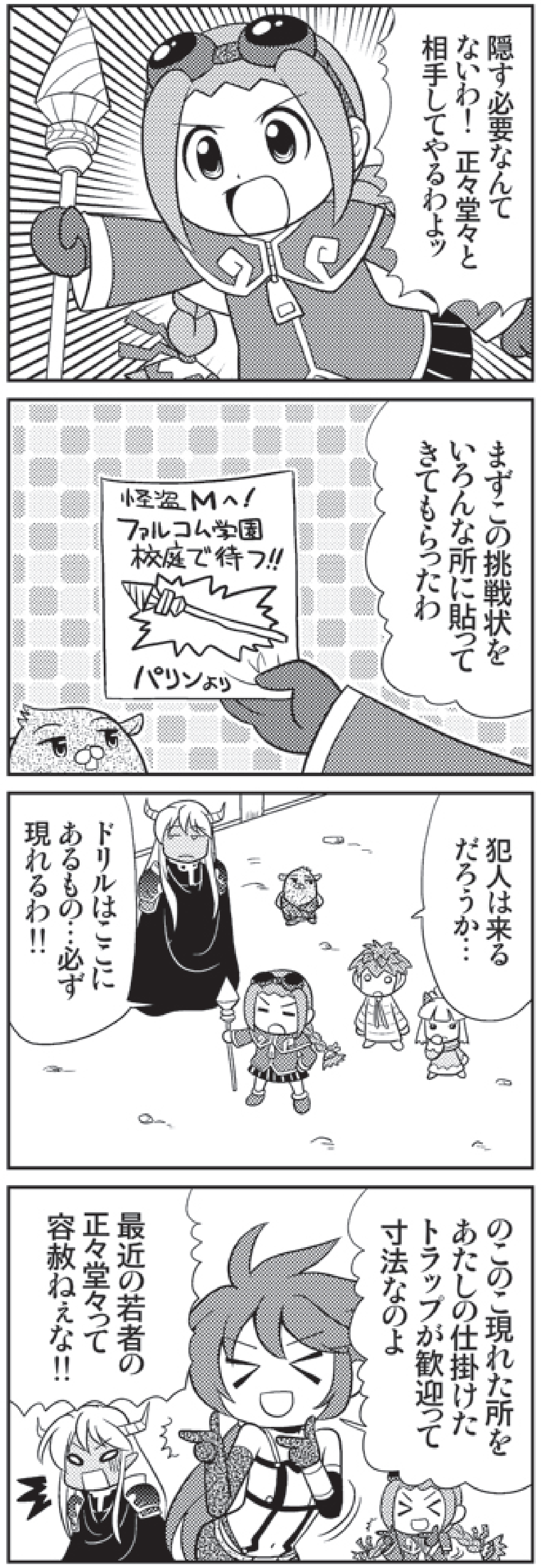
Mな人々



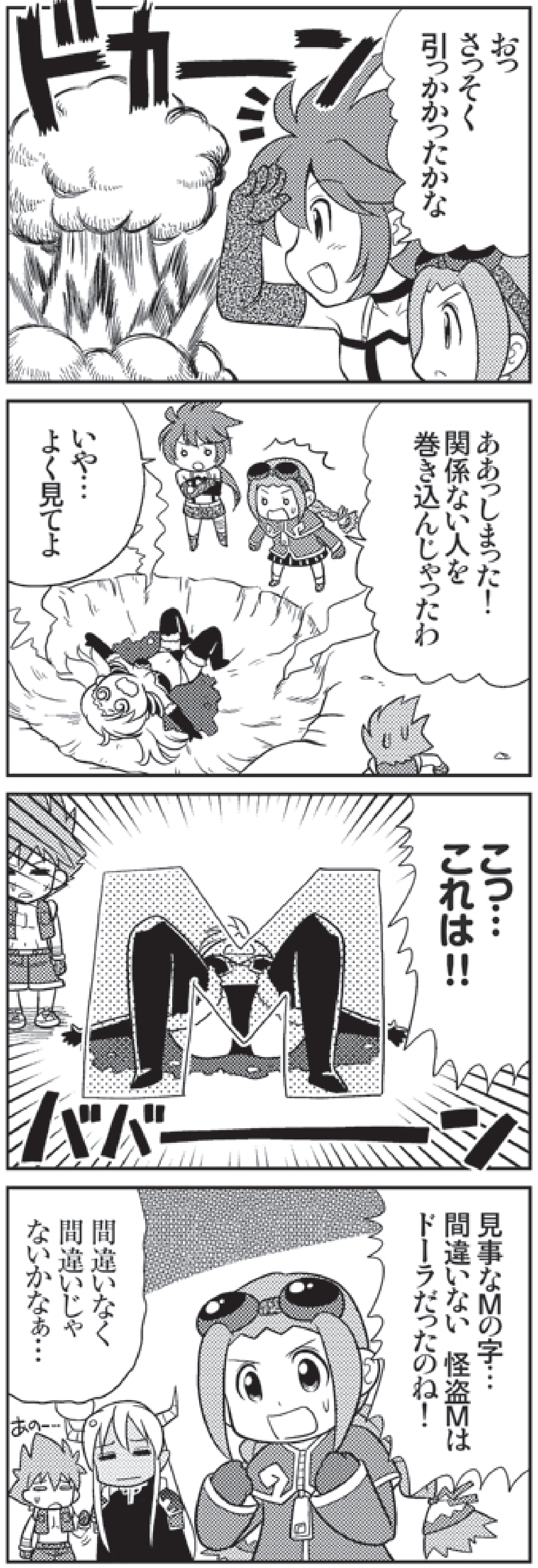
M と B



正々堂々と



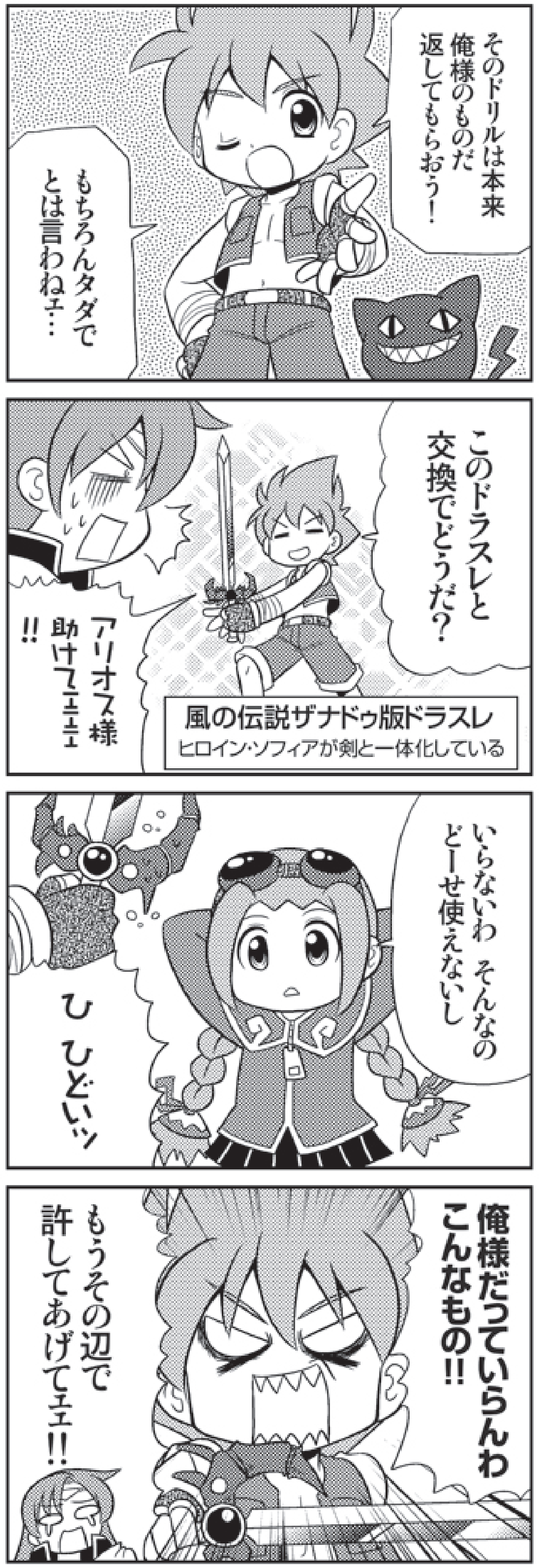
Mの正体



ヒトもオバケも



物々交換



モトロ vs …



オトナの目論見



コスチュームチェンジ



ドリルの時代




THE LEGEND OF HEROES
閃の軌跡
原作：日本ファルコム（『英雄伝説 閃の軌跡』）
脚本：恵村まお
漫画：さがら梨々
第14話
綺麗な湖だな…
ええ 日の光が水面に反射して…
ここが《ラクリマ湖》だ ご隠居はこの小屋に住んでいる
なかなか優雅な暮らしをしているじゃないか
さっそく訪ね…
ガチャ
おお ガイウス
ご隠居！


半年ぶりくらいじゃの
ご無沙汰しています
え…
それとアリサ
直接会うのは5年ぶりになるかな？
おおお……お祖父様っ!!
どうしてこんな所にいらっしゃるんですかっ!!?
…まあ見当は付いておるじゃろうが
あらためて自己紹介といこうか

グエン・ラインフォルト
そちらのアリサの祖父にあたる
よろしく頼むぞい
しかし5年も経つと見違えるほど成長したの～
背はもちろんじゃが出てるところも立派に出て
お祖父様！
今までどうしてたんですか？
ルーレからいなくなって…
どれだけ私が心配したと思ってるんですか!?
一応季節ごとには便りを出しておったじゃろう？
お前がシャロンちゃんに預けた手紙をいつもちゃあんと読んでおるしな
だ だからって5年も前からずっとここで…？
いや 1年の半分くらいは帝国に戻ったり大陸各地の知り合いの所に遊びに行っておるよ


その
グエンさん
どうやら俺たちの実習についてもご存知みたいですけど…
そう言えば…まるで俺たちが来るのを知っていたような様子だったな
ふふ 実習の期間中お前さんたちが訪ねてくるだろうとは思っていたよ
イリーナの連絡にもあったしな
!?
か 母様と今でもやり取りを…!?
まあ必要最低限じゃが
やれやれ我が娘ながらどこをどう育ったらあんな仕事中毒（ワーカホリック）になるのやら
……


さて コーヒーも飲み終えたし導力車の修理に向かうとするか
ガタッ
リィンと言ったか―― 馬の後ろに乗せてもらえるかね？
……
――あの グエンさん どうして今までアリサに所在を教えなかったんですか？
ふむ… なあリィン君
お前さんから見たアリサはどんな子だと思う？
それは…
頑張り屋だと思います 色々な意味で
ああ そうじゃな


見ての通り器量良しじゃし貴族の子女にも負けぬ振る舞いや教養を身につけておるじゃろ？
そうですね正直 凄いと思います
ですが…
人に頼らずに何でも一人で解決しようとする…そんなところがあるじゃろ？
ええ……そんな風には感じていました
義理堅くて人には親切で
でも 自分のことは人に頼らず 全て一人で抱え込もうとする……
――アリサ・R
ルーレ市からやって来たわ
そその勿体ぶってるわけじゃ…！
ただ あまり周りに知られると面倒な事になるかなって……
多分 あの子のそんな性分はワシと…
娘の仲が原因なんじゃろう
……！
ワシが所在を告げなかったのもそのあたりが原因でな
まぁ これ以上はワシの口から言うわけにはいかん
お前さんが孫娘とイイ仲になれば自然と教えてくれるじゃろ
いい仲って…何か誤解していませんか？
おや 違うのかの？
手紙でお前さんの名前を見たからてっきり何かあったかと思ったが
いや その…ちょっとしたアクシデントはありましたけど
ほう アクシデントか！
登校途中にパンを咥えたあの子と曲がり角でぶつかりでもしたかの？
それで偶然ムフフでラッキーな体勢になったりしたとか！
……
おおっ!? 本当に何かあったのか!?
それは詳しくえぐり込むように聞かせてもら……
もうっ！お祖父様!!


んー…
あれって…
シカンガクインの人たちだ!
何でこんな所にいるんだろ?
ま いっか なんだか面白くなりそうだし♥
それじゃあガーちゃん任務開始しちゃおっか♪


わいわい
わいわい
いや～何というか驚いたね
あのグエン・ラインフォルトがこんな場所で暮らしてたなんて
ラインフォルトと言えば 昔は火薬や大砲を手がける武器工房というイメージだったが…
いつの間にか鉄道や導力兵器を大々的に手がけていたような印象だな
ああ 実際ラインフォルトは帝国だけじゃなく大陸諸国でも手広く販路を拡大しているし…
その意味では帝国では珍しい「国際人」とも言えるかもしれないね
わっはっは
なるほど…物知りだとは思ったがそこまでの人物だったとは…
しかしその彼がどうして会長を辞めたのかは謎なんだよな
一説には病気と言われてたけど
全然元気そうだし…


こりゃあ
あの噂の方が
正しかったの
かもしれないな
あの噂？
おっと
何でもない
ゴシップ
みたいな
ものだよ
アリサ…？
……
バカみたい
一人で
空回っちゃって…
ほーら アリサ
すっごい風景
じゃろう！
うん
すっごいね！


ほらほら
2人とも
予定が
押してるんだから
さっさと行くわよ
いいじゃないか
滅多にない休暇だ
君も少しは
羽を伸ばすといい
ガチャ
…アリサ
！
リィン…！
大丈夫か？
少しフラついてる
みたいだけど
べ 別にちょっと
ぼうっとしてる
だけで……
少し風に
当たれば……
！
一日中 馬に
乗ってかなり体力を
消耗したんだろう
ほら 言わん
こっちゃない
ご
ごめんなさい…



そっか…そうよね…そんなことも自分で気付かなかったんだ…
アリサ
風に当たるなら俯いているよりも空を見上げてみなよ
え…？
あ――



――8年前だったわ技術者だった父が亡くなったのは
それをきっかけに私の家は大きく変わってしまった
当時取締役だった母は事業拡大に没頭するようになって…
「家族」をほとんど顧みなくなったわ
一緒に食事できる機会すら3ヶ月に一度あるかどうか…
代わりに一緒にいてくれたのがお祖父様とシャロンだったの
貴族の子からは疎まれ平民の子からは特別扱いされて友達は少なかったけど…
2人が居てくれたから少なくとも寂しくはなかったわ
お祖父様は乗馬やバイオリンなど色々な趣味の手ほどきをしてくれたし…
シャロンからは護身術や弓の扱い貴族の子女並みの礼儀作法を教わった


いっぽう母は……会長である祖父の意向を無視して際限なくグループを拡大していった
元々かなり大きな技術工房ではあったけど…
ここ数年ウチが作ってきたものを考えるとさすがに行き過ぎとしか思えない
ここ数年…？
聞いたことくらいあるでしょう？帝国東部ガレリア要塞に2門設置されている《列車砲》のことは
！
列車砲…何でも世界最大の長距離導力砲だとか…
共和国と領有権争いをしている《クロスベル自治州》の全域をカバー
たった2時間で人口50万ものクロスベル市を壊滅できる…恐ろしいほどの破壊力よ
……とんでもないな戦争というより虐殺にしか結びつかないと思うんだが…
ええ…私もそう思う
受注したのは母だけど祖父は何というバチ当たりな兵器を造ったんだろうって悩んだみたい
そして帝国軍に2門の列車砲を引き渡すか迷っていたところで……
取締役だった母の裏切りにあった
え――
ラインフォルトグループの大株主全員を味方に付けたのよ
お祖父様は退陣を余儀なくされ…母の新会長への就任が決定した
お祖父様は…私を残してラインフォルトを去った
味方だと思っていたシャロンも雇い主である母に従うだけだった
それが――5年前の出来事よ
……アリサは…
納得がいかなかったんだな？
お母さんのした事というより「家族」が壊れてしまったことが
！


ええ…そうね
実の親を陥れた母様も それをただ受け入れたお祖父様も 私は納得いかなかった
あれだけ優しかったシャロンが何も言ってくれなかったことも
RFグループ…その巨大な存在の前では家族の絆なんて意味がないなんて
…絶対に認めたくはなかった
だから私は――実家を出て士官学院に入ったのかもしれない
でも結局全然母と家から逃げられてなくて お祖父様は飄々と第二の人生を楽しんでるし
ゴロン…
私 一体何やってるんだろうって少し滅入ってたけど…
ス…
でも
この星空を見上げたら――どうでも良くなっちゃったわ


やっとわかった気がする……どうしてお祖父様がこの地に移り住んだのかを
……そっか…
ゴロ
やっぱりアリサは強いな
こうして俺に色々と話してくれたってことは……
ス…
たぶん 前に進めるきっかけが掴めたってことだろう?


……
ふふっ …そうね
だとしたら それはきっと 士官学院に 入ったからだと思う
VII組のみんなや 部活のみんな……
本音で 向き合える仲間と 出会えたから 私は強くなれた
だから── ありがとう
心配してくれて… 空を見上げろと 言ってくれて
どういたしまして …白状すると 追ってきたのは 委員長に促された からでさ…
はは…
申しわけない
なんで俺が!? いいけど…
ふふっ だろうと 思った


……
私の事を 強いって言って くれたけど
貴方だって実習の リーダーとか 色々と頑張って いるじゃない?
俺が士官学院に 入った理由……
あえて言葉にするなら 「自分を見つけるため」
…いや まだまださ 「自分」から 逃げてるようじゃ
え……
── そう思って いたんだけど


本当は ただ
逃げてるだけじゃ
ないかって
不安に駆られる
時がある
家族からも
自分自身からも――
……
ご家族とあまり
上手くいって
ないの？
いや
血は繋がって
いなくても両親とも
俺を慈しんでくれて
いるし妹とも…仲は
悪くないと思う
全部……
俺自身の
問題なんだ
リィン……
――でも
そういう風に
言えるって
いうことは…
たぶん 前に
進めるきっかけが
掴めたってこと
でしょう？
！


……
ふふっ
もらった言葉を
そっくりそのまま
お返しするわ
貴方
いつもどれだけ
恥ずかしい言葉を
臆面もなく
言ってるか……
少しは
自覚すると
いいんじゃ
ない？
はは…
参ったな
そうだな
俺も少しずつ
前に進んで
行けてるんだよな
学院に入って
Ⅶ組のみんなや
同級生や先輩たちと
出会えて……
――こんな風に
みんなと同じ時間を
共に過ごすことで
ええ この
特別実習だって
きっと私たちの
糧になるわ
だから――
…………
こんな風に
みんなと…？
あー…
コホン
・・・


!!?
ああ あなた達!
なかなか戻って来ないので様子を見に来たんですけど……
あはは
いったい いつからいたの!?
――でも そういう風に言えるってことは……
たぶん前に進めるきっかけが掴めたってことでしょう?
いやあああ やめてえええ
ふふっ… 思わずジンときちゃいました
ああ… 悪いとは思ったが良い場面に立ち合わせてもらった
あれは…! リィンの恥ずかしい台詞をそのまま返しただけで…っ!
ああもう! なんで私が一番恥ずかしい人になってるの!?
ええい こうなったらあなた達も加わりなさいっ!
恥ずかしい青春トークを一緒にぶちまけてもらうわよ!
お疲れだったな
いや こちらの方が力付けてもらったくらいさ
――なあ ガイウス
ああ… そうだろう?
ええっ!?
本当に―― いい所だな
お断りだ
特別実習３日目　朝
さて―― 今日の実習だが
昨日よりも依頼の数は絞らせてもらった
残る1日はある程度君たちの好きなように過ごすといいだろう
ご配慮ありがとうございます
バタ バタ
ラカン! ラカンはおるか!
長老…?


01
英雄伝説
閃の軌跡
原作●日本ファルコム
脚本●恵村まお
漫画●さがら梨々


ゼンダー門から先ほど連絡があった
どうやら帝国軍の監視塔が何者かの攻撃を受けたらしい
!?
なに…!?
今日の真夜中の話らしい
しかも…
どうやら共和国軍の基地も攻撃を受けたらしくてな
これは少々…騒がしくなるかもしれん
両国が受けた謎の攻撃とは――!?

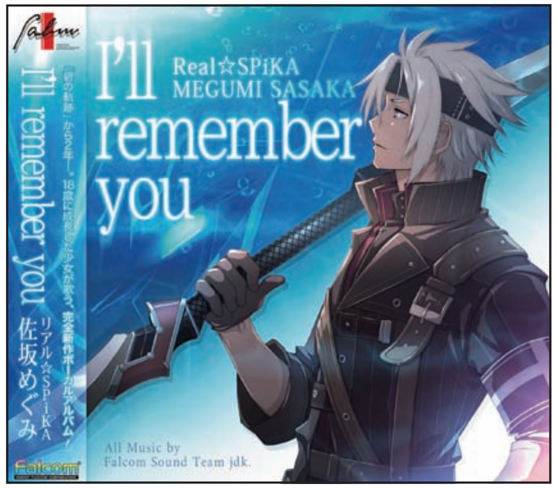
▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『I'll remember you -リアル☆SPiKA/佐坂めぐみ-』＆『英雄伝説 空の軌跡SC Evolution オリジナルサウンドトラック』

魅力溢れる2枚のアルバムが同日発売!

16歳で『英雄伝説 碧の軌跡 Evolution』主題歌を担当した佐坂めぐみが『東京ザナドゥ』、《リアル☆SPiKA》での活動を経てボーカリストとして成長を遂げた最新アルバムが登場！　また、12月10日(木)に発売される「軌跡シリーズ」最新作『英雄伝説 空の軌跡SC Evolution』より、劇中最新曲全43曲を収録を収録した２枚組音楽アルバムも同日発売される。ファルコムの音楽世界にたっぷりと浸れるスペシャルな１枚をゲットしよう！　どちらも１月15日発売。



『I'll remember you -リアル☆SPiKA/佐坂めぐみ-』
CD盤：1,512円（税込）
ダウンロード版：1,200円（税込）
ハイレゾ版：1,400円(税込)



『英雄伝説 空の軌跡SC Evolutionオリジナルサウンドトラック』
CD盤：3,218円（税込）
ダウンロード版：2,400円(税込)
ハイレゾ音源版：2,700円(税込)

ファルコム楽曲、６大音楽配信サービスへ

お気に入りの音楽が世界中で!



日本ファルコムが誇る人気作「軌跡」、「イース」シリーズをはじめとするファルコム楽曲4,591曲が定額制６大音楽配信サービスで提供を開始！　最新作『東京ザナドゥ』や過去に発売された多数の名盤が世界103ヶ国どこからでも楽しめる。対象となるのはApple Music・LINE MUSIC・Amazon Prime Music・Google Play Music・AWA・KKBOXの６つのサービス。料金プランなどは各サービスの案内ページまで。（※LINE MUSIC・AWAは日本国内のみの提供）

コミックマーケット89 出展情報

日本ファルコムが新作グッズを多数用意して冬コミに出展決定！『碧Evo』からは超美麗な描き下ろしタペストリーが、『空SC Evo』からは寒い冬にもホッコリできるキュートな紅茶缶などが販売される。イベント会場限定の特典もあるので、詳細は随時更新の特設サイトでも欠かさずチェックしよう！

◯開催情報
【日程】2015年12月29日(火)～31日(木)
【会場】東京国際展示場（東京ビッグサイト）西４階企業ブース　No.545
【特設サイト】http://www.falcom.com/c89/index.html



英雄伝説 空の軌跡 SC Evolution タイタック（ウロボロスver.）
2,000円（税込）



英雄伝説 碧の軌跡 Evolution B2タペストリー　-舞姫の余暇-
3,000円（税込）



英雄伝説 碧の軌跡 Evolution B2タペストリー　-Ready!-
3,000円（税込）



みっしぃ ウッドクリップセット 3種
A・B・C 各1,000円（税込）



英雄伝説 空の軌跡 SC Evolution レンの紅茶（コルクコースター付き）
2,000円（税込）

ナイアル＆ドロシーコンビの今度の取材紀行は『SC』が舞台！



英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット 2

『英雄伝説 空の軌跡』のリベール通信社で働く記者のナイアルとカメラマンのドロシーが繰り広げるリベール取材紀行の第2巻。『空の軌跡SC』の世界を舞台に、凸凹記者コンビのふたりが訪れた街で出会う様々な人々との交流を描いていく。今回はティータやレン、ミュラーといった人気キャラクターも続々と登場。

2015年
6月10日発売!

1,300円+税

判型：B6正寸　並製ページ数:304
ISBN：978-4-8021-3004-2
発行元:フィールドワイ　発売元:メディアパル



斎賀さんの『空FC Evo』プレイ事情も注目！な11月配信を振り返り！

寒さも本格化し、お家にこもってのゲームプレイが捗る季節になってきた11月。今回は、『空 SC Evo』発売を直前に控えた回の配信ということもあり、斎賀さんが自身のプレイ状況を報告、なんともう終盤間近だということが判明。そしてティータへの意外な感想も聴くことができた。神田さんはゲームが苦手ということもあり、クリアまではもう少しかかりそうだが、ぜひとも発売までにはクリアを目指して頑張って欲しい！　また、12月のおたよりには、「 5空ポイント」でもらえる番組ステッカーのほかに、『空 SC Evo』のポスターがもらえるキャンペーンも発表された。今からでも間に合うかもしれないので、どんどん投稿していこう！



みんな解けるか?! ファルコム検定

毎回『空の軌跡』に関するクイズを出題し、リスナーが“あえてボケる”という、検定とは名ばかりの大喜利コーナー。オリビエの用法容量にはくれぐれもご注意を！



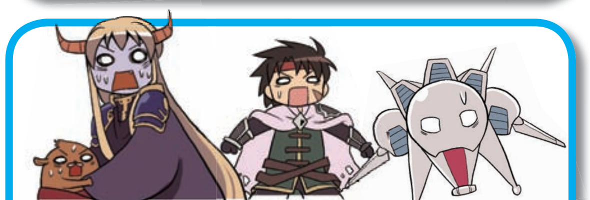
ファルコム ミュージックライブラリー

『めんどくさいラジオ』でも大人気だったこのコーナーは『そららじ』でも継続！　ファルコム作品の魅力溢れるBGMを毎回たっぷりと聴くことができるコーナーだ！



言葉の小箱

『そららじ』の看板コーナーになりそうなこの企画。エステルとヨシュアに自分が考えた掛け合いを喋ってもらえるという、夢のようなコーナーになっているぞ！
　投稿をする時は、どちらのセリフか分かるように書くのが採用率アップのポイント！



あ、あんですって～？！ ファルコムニュース

ファルコム作品の最新情報をお届けするニュースコーナー。思いがけないニュースを聴くことができるかも？

エステル&ヨシュアのファルコム空の軌跡ラジオ
■配信日　毎月2回（金曜日）更新　ラジオ公式ホームページ、日本ファルコムYoutubeチャンネル、ランティスラジオにて公表配信中
■公式ホームページ　http://www.sora-evo.com/radio/

英雄伝説 閃の軌跡 ～メンタルクロスリンク～

著：草薙アキ　イラスト：YahaKo



二章　訪れた非日常

新型ARCUSの誤作動によって、戦術リンクを組んでいた互いの精神が入れ替わってしまったリィンたちは、なんとか元に戻そうと、再度戦術リンクを組み、戦闘を行おうとしていた。

こうなってしまった原因が、精度を向上させた戦術リンクのせいだと言うのであれば、同じ原理を用いることで、再び誤作動を起こそうと考えたのである。

が。

「……駄目だ。思うように剣が振るえぬ……」

がんっ、と地面に大剣の切っ先を突き刺したのは、無駄に凛々しい顔つきになったフィーだった。

言わずもがな、中身はラウラである。

「そうだね。たぶん身体と武器が合ってないんだと思う」

発売直前の単行本情報も要チェック！

『英雄伝説 閃の軌跡～メンタルクロスリンク～』お試し読み第二弾！

草薙アキ先生の描く『英雄伝説 閃の軌跡 メンタルクロスリンク』の単行本が12月10日に発売されることが決定！　発売直前となる今回は、本編小説の試し読み第二弾を敢行！　また、12月に更新されるファルコムBOOKSのホームページ上では、草薙アキ先生書きおろしの読み切り短編も掲載予定なので、そちらも合わせてチェックしてみて欲しい！



2015年12月10日発売！

ファルコムBOOKS公式ホームページ ▶ http://www.field-y.co.jp/falcombooks/

■書籍情報

『英雄伝説 閃の軌跡～メンタルクロスリンク～』 著：草薙アキ　イラスト：YahaKo
2015年12月発売予定　価格：1,200円（税別）　判型：B6正寸　256ページ

当然、寝惚け眼で両手の双銃剣を見つめるラウラには、代わりにフィーの精神が宿っていた。
「確かに。いつもより剣が重く感じるな。重心も安定しない」
彼女らに同意するのは、刀を握り、男っぽい口調になったアリサと、
「私も。弓を引く分には問題ないけれど、この身体にはちょっと小さいかもしれないわね。まあ私専用に調整してあるから、合わないのは当然なのだけれど……」
若干内股気味になり、どこかなよっとした雰囲気で女性の言葉を使うリィンだった。
もちろん入れ替わっているので、アリサにはリィンの、リィンにはアリサの精神がそれぞれ定着している。
「武器もそうですが、身体の方も修練を始めた時から、最も効率よく己が武器を扱えるよう昇華していきます。である以上、合わないのは当然ですわ」
そしてこの状況でも涼しい顔なのは、アリサのメイドであるシャロンだ。
とくに動じた素振りも見せず、自分のことを「お坊ちゃま」と呼ぶなど、どこか楽しんでいるようにも見えるシャロンの様子に、アリサはジト目をぶつけながら問う。
「じゃあどうしろって言うのよ？　お互いの武器を交換しろとでも？」
「いえ、確かにその身体に合った武器にした方がよいとは思いますが、それは〝内側〟と〝外側〟――つまり〝心身〟がきちんと揃っている状態での話です。現状では、たとえ武器を交換したとしても、高次元での連携は難しいと思いますわ」

シャロンの言葉を聞き、一同の表情が曇る。
事はそう単純なものではない、と再度思い知らされたからだ。
「ならば現状で合う大きさの武器を、改めて見繕うというのはどうだろうか？　多少のずれは感じると思うが、それでも自身の扱う武器と同種のものだ。慣れるまでそう時間もかかるまい」
「……ん。ナイスアイディア、ラウラ」
ぶい、とVサインを作るフィーに、アリサは慌てて口を挟む。
「ちょ、ちょっと待って!?　確かにうちの製品で起こった事故だし、そういうことなら、ラインフォルトが責任を持って製作してくれるとは思うけれど……」
実家と距離を置いているアリサは、言いづらそうに横目でシャロンを見やる。
言外にある彼女の気持ちを理解しているシャロンは、にこりと咲き誇る花のように微笑み、「もちろんですわ」と了承の旨を告げた。
それに安堵の表情を浮かべたアリサだったが、自分の言いたいことはそこではないと、捲し立てるように口を開いた。
「その間ずっとこの身体でいろって言うの!?　二十四時間ずっと!?」
「俺はとくに気にしないが……」
「私が気にするのよ！　というか、〝とくに気にしない〟ってどういうことよ!?　私の身体には何も感じないと言いたいわけ!?」

「い、いや、そういうことじゃなくてだな……」
「じゃあどうなの!? リィンは私のことをどう思って――って、何言わせるのよ!? 馬鹿っ！」
　真っ赤な顔で後ろを向いてしまったアリサに、リィンはどうしていいか分からず、たじたじになっていた。
「……アリサ、意外と大胆」
「ふふ、恥じらいに顔を染めるお坊ちゃまも可愛いですわ」
「シャロン殿、そなたやはり楽しんでいるのでは……？」
　リィンとアリサのやり取りを遠巻きに、そんな会話をする三人だった。

　今回の依頼はラインフォルトの威信もかかっているため、ひとまず学院長以上への報告はしないでもらいたいとシャロンから念押しされたリィンたちは、とりあえず生徒会長であるトワ・ハーシェルに状況を報告し、事態の打開へ助力を乞うことにした。
　なお、シャロンは一度ラインフォルト本社のある〝黒銀の鋼都〟――ルーレに戻り、何か解決策がないかを探してみるということだった。
「――なるほど。にわかには信じがたいけど、状況は把握出来たと思う。それで、えっと……リィン君？」
　と、未だに確信を持てない様子で、アリサ（リィン）に問いかけるのは、ほんわかと柔和だ

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

が、どう見ても年下にしか見えない容貌の、小柄な美少女だった。
　トワ・ハーシェル。
　幼い外見と口調から、よく年下だと間違われがちだが、これでもれっきとした18歳であり、リィンたちの先輩にあたる。
　頑張り屋で面倒見の良い優しい性格の上、常人離れした事務処理能力を有し、常に仕事に追われている印象を受けるが、彼女の場合、任された仕事はきちんと全部こなしている。
　以上のことから、トワ自身は平民の出でありつつも、身分を問わず支持を受け、生徒会長職に就任した。
　彼女の優秀さは、学院の枠を越えて様々な方面にも行き届いており、先日クロスベルで行われた、〝西ゼムリア通商会議〟でも、随行団の一員に抜擢されるほどであった。
　そんな彼女に問いかけられたリィンは、申し訳なさと情けなさが入り交じったような表情で「はい……」と答えた。
「本当にリィン君なんだ……。で、こっちが……アリサちゃん？」
「ええ、そうです……」
　がっくりと肩を落とし、リィン同様アリサも答える。
「う、うーん……。えっと……ラウラちゃんとフィーちゃん？」
「うむ」



「……ん」
「え、えっと……」
　あからさまに動揺するトワに、リィンたちもいたたまれない気持ちだった。
「なんかすみません……」
「えっ⁉　あ、ううん！　大丈夫！　ＡＲＣＵＳの誤作動だもん。仕方ないよ。それより皆の方こそ大丈夫？」
「はい。俺たちは大丈夫です。精神は入れ替わりましたけど、それによって身体に不調が起きるというのは、今のところないみたいなので」
「そっかぁ……。よかったぁ……」
　トワがほっと胸を撫で下ろし、「でも何かあったらすぐに言わなくちゃ駄目だよ？」と少々語尾を強くして言った。
　彼女は自分がどんなに忙しい状況でも、周囲への気遣いを絶対に忘れない。
　そういう優しさの持ち主だからこそ、身分を越え、多くの人から支持を集めることが出来るのだろう。
　そう感じたリィンは、「はい」と返事をした後に、改めて彼女にお礼を言う。
「ありがとうございます。会長と話していたら、なんだか少し気が楽になりました」
「えへへ、どういたしまして。私も皆が早く元に戻れるように協力するから、出来ることがあ

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

ったら遠慮なく言ってねっ！」
　両手を胸元でぐっと握るトワの姿に、リィンたちはなんとも言えぬ心強さを覚えるのだった。

「というわけで、リィン君たちを元に戻すため、皆から案を募りたいと思いますっ！」
　教卓の前で凛然と言い放つのは、件のトワである。
　普段のほんわかとした雰囲気とは違い、今は生徒会長として、皆のリーダーであるトワ・ハーシェルの姿を見せていた。
　隣にはクラス委員長であるエマの姿もあり、一年Ⅶ組の教室内には、帝都ヘイムダルへと向かったクロウとミリアム以外の、《Ⅶ組》のメンバーがほとんど揃って着座していた。
　こういう事態になってしまっては仕方がない。
　リィンたちはトワの協力を得て、彼女のＡＲＣＵＳで、皆に連絡を取ってもらったのだ。
　各々の事情を知っている中で、非常招集をかけさせてもらったこと、そしてその役をトワに任せてしまったことに、心から申し訳なく思うリィンたちであったが、トワを含めたメンバー全員から、「気にしなくていい」「こういう時に呼ばなくてどうするのか」と喝を入れられ、しみじみとした気持ちになっていた。
　進行役をトワが、書記役をエマが務める中、入れ替わってしまったリィンたちの精神を、なんとか元に戻すための意見交換が始まる。

　リィンたちの席は、本人だと分かりやすいよう、精神の方に合わせて変更している。
　真っ先に手を上げたのは、マキアスだった。
「はい、マキアス君」
「はい。まずは現状をしっかりと確認した方がいいと思います。何故こうなってしまったのか、原因は本当にＡＲＣＵＳの誤作動だけなのかを今一度――」
「阿呆が。そんなことを呑気に考えている時間があるとでも思っているのか？」
　途中で口を挟んだのは、腕を組み、不遜な態度でマキアスを見やるユーシスだ。
「なっ⁉　それはどういう意味だ⁉」
「現状をよく考えてもみろ。こいつらの状態は非常に不安定だ。不確定要素も多い。脅すわけではないが、いつ何が起こってもおかしくはないんだぞ？」
「そ、それはそうだが……」
「ならばもっと効率的に物事を考えるべきだ。早々にこいつらを元に戻す方法をな」
「だ、だからこそ、そのために現状の確認をする必要が――」
「ちょ、ちょっと二人とも！　今は言い争っている場合じゃないでしょ？」
　エリオットにそう諭され、二人はばつが悪そうに口をつぐんだ。
「うん、君たちの意見は分かったよ。原因については、シャロンさんの方がラインフォルトに直接出向いているから、それで何か分かればと思うけど、現状では戦術リンクの感応が高過ぎ

たのが原因だと見ているみたい」

「だからもう一度その感応現象を起こそうとしたんでしたよね？」

　エマに問われ、トワは「うん、そうみたい」と頷いた。

「その点については、リィン君たちの方が詳しいと思うけど、どうかな？」

「ええ、トワ会長の言うとおりで間違いはないです。俺たちはもう一度同じことを繰り返せば、元に戻れるんじゃないかと考えました。でも身体と武器が合わなくて、結果的に失敗しました」

　リィンの言葉に、ラウラも続く。

「一応それぞれの身体に合う武器の発注も考えたのだが、色々と問題も浮上してな。現状ではやはり手詰まりだと言うほかはないだろう」

　そこに食いついたのは、やはりアリサだった。

「し、仕方ないじゃない！　あなたたちはまだ女の子同士だからいいでしょうけど、私なんてリィンとなのよ⁉」

「いや、そんなに嫌がらなくても……」

「ま、まあ仕方ないよ。アリサちゃんだって女の子だし。で、でも別にリィン君のことが嫌だからとか、そういうことじゃないんでしょ？　そうだよね？　アリサちゃん」

「えっ⁉　そ、それはまあそうですけど……」

　どこか言いづらそうに顔を伏せるアリサの顔は、ほんのりと赤みを帯びていた。

「……やはりどうにも慣れないな」

「あはは、まあ僕も未だに信じられないからね」

　恥じらうアリサ（外見はリィン）の姿を前に、頭痛を覚えるマキアスと、苦笑いのエリオットだった。

「ところでガイウス、お前はどう思う？　先ほどから意見を述べていないようだが？」

　ユーシスにそう問われたガイウスは、「そうだな」と考える素振りを見せた後、一度頷いてから口を開いた。

「オレはこれも風と女神の導きだと思っている」

「ほう、その根拠はなんだ？」

「ああ、オレたちはこのクラスに来てから、今までに様々なことを経験してきた。困難にぶつかったことも多々あったと思う。だがオレたちはそれを乗り越え、前に進んできた。学んだことも多い。だからこれも何かしらの試練なのではないかと思えるんだ。実際に精神が入れ替わったリィンたちにしろ、それを支えるオレたちにしろ、それは同じだとオレは考えている」

「なるほど。お前らしい意見だな」

　ふっと口元を緩めるユーシスに、ガイウスも微笑みを浮かべ、こう言い切った。

「心配するな。たとえ時間がかかったとしても、きっとオレたちなら乗り越えられるはずだ」

「ガイウス……」

彼のその一言に、リィンを始めとした全員が、胸に熱いものを感じていた。
が。
「あ、あの、なるべくなら時間をかけないようにお願いしたいのだけれど……」
アリサだけは、一人丸く収まりそうな雰囲気に異を唱えていたのだった。

すでに静かな寝息を立てているマイペースなフィーを尻目に、再び意見交換が行われる。
「他に意見がある人はいるかな？」
トワがそう促せば、「じゃあ僕も……」とエリオットが小さく手を上げた。
「はい、エリオット君」
「えっと、例えばだけど、ARCUSに何かしらの物理的な刺激を与えてみるのはどうかなって。昔、父さんがそうやって導力ラジオを直したことがあったから」
「ふむ、悪くはない考えだとは思うが……」
「いや、待ちたまえ。ただでさえ現状が不安定かつ不確定要素で溢れているんだ。迂闊なことをして、もし二度と戻らなくなったらどうするんだ？」
マキアスの指摘に、ラウラは「確かに……」と眉根を寄せた。
何か手を打たなければならないのは分かっている。
しかし下手に何かして、もし万が一のことが起こった場合、どうすればいいのか。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

糸口がまったく見えないこの現状に、リィンたちは皆やり切れぬ思いで顔を曇らせていた。
「あ、諦めちゃ駄目だよ！　入れ替わることが出来たんだもん！　絶対に元に戻る方法があるはずだよ！」
「会長……」
陰鬱な空気を吹き飛ばすかのように声を張り上げたトワの姿に力を貰い、リィンは一度瞳を閉じ、小さく頷いた。
「そうだ。さっきガイウスも言っていたとおり、俺たちなら絶対に乗り越えられる――いや、必ず乗り越えてみせる！　だからすまない、皆。難しい話だというのは重々承知しているが、俺たちに力を貸して欲しい」
真摯に頭を下げるリィンに、トワを含めた《Ⅶ組》のメンバー全員が当然だと言わんばかりの表情を浮かべていた。
「もちろんだよ！　だって仲間が困ってるんだもの」
「エリオットの言うとおりだ。オレに出来ることがあれば、なんでも言ってくれ」
「右に同じだ。俺の力が必要ならば、いつでも言うがいい」
「そうだな。こればかりは君に同意しよう。僕も力になる」
「ふふ、私もです。もちろんミリアムちゃんやクロウさんも同じだと思いますよ」
「だね！　クロウ君もああ見えて、困ってる人は放っておけない性格だし」

「皆……」

　清々しいくらいの笑顔を向けてくれる皆の様子に、リィンたちは心の底からお礼を述べた。

「本当にすまない……」

「うむ。そなたたちに心よりの感謝を」

「私も。なんてお礼を言えばいいのか分からないけれど……でもありがとう。恩に着るわ」

と。

「……ん。サンクス」

「――っ!?」

　突如聞こえたフィーの声に、リィンたちはこぞって目を丸くした。

「フィー、寝ていたんじゃないのか?」

「……ん。でもさすがにこの状況では起きざるを得ないと判断」

「ふふ、そなたらしいな」

　ほんわかとした雰囲気と、皆の優しい笑顔に包まれながら、リィンたちは今一度希望を取り戻す。

　すると、

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

「――さすがはあたしの教え子たちね。泣かせるじゃないの」

　タイミングを見計らったかのように教室の扉が開き、20代半ばと思しき一人の女性が姿を現した。

「さ、サラ教官!?」

　トワが驚いたように声を上げれば、サラ・バレスタインは、何やら上機嫌で歩を進めた。

　サラ・バレスタイン。

　リィンたち《Ⅶ組》の担任教官で、武術及び実践技術を担当している女性だ。

　ぱっと見は綺麗なお姉さんであるが、お調子者な性格の上、昼間からビールを飲んだりと、私生活はかなりだらしない。

　なお、好みのタイプは〝渋めのおじさま〟である。

　件のことから、色々と勘違いされがちだが、実は最年少で〝A級遊撃士〟となった過去を持ち、《紫電のバレスタイン》とまで呼ばれるほどの圧倒的な実力を持っている。

　トールズ士官学院で教官になる前は、凄腕の遊撃士として、帝国内にある遊撃士協会（ブレイサー・ギルド）の支部に所属していたのだが、《鉄血宰相》ことギリアス・オズボーンの圧力によって、協会自体が縮小させられてしまったため、去らざるを得なくなってしまったのだ。

が、後に学院長のヴァンダイクにスカウトされたことで再就職し、今に至っている。
　サラは相変わらずの軽い足取りで教卓近くまで赴くと、教室内を見渡し、「聞いたわよ、皆。何やら大変な事態になってるみたいじゃないの」と言った後、リィンとアリサに向けてそれぞれ告げた。
「で、君がリィン・ラインフォルト君で、そちらがアリサ・シュヴァルツァーさんだったかしら？」
『……』
　この状況で何を言ってるんだ、この人は……、という視線が四方八方からサラに突き刺さるが、彼女は気にする様子をおくびにも出さず、話を続ける。
「あの、サラ教官？」
「何かしら？　アリサ・シュヴァルツァーさん」
「いえ、リィン・シュヴァルツァーです。見た目はアリサですけど……」
「もう、そんなの分かってるわよ。あたしが言いたいのは、アリサが嫁入りしたの？　ってこと♪」
「よ、嫁入りなんてしてません！」
　顔を紅潮させながら慌てて否定したのは、もちろんアリサである。
　その反応を期待していたサラは、満足そうに「よしよし」と一人頷いていた。
「サラ、それだとわたしはラウラのお嫁さんになる」

英雄伝説　閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

「あら、それもありっちゃありよ？　世の中には〝乙女の嗜み〟というものがあるくらいだし」
「……？　サラ、爆薬とか煙幕を持ち歩くのが、〝乙女の嗜み〟じゃないの？」
　小首を傾げながら言うフィーに、今度はエマが慌て始めた。
「な、なんでもありませんよ？　フィーちゃん。そ、それよりサラ教官はどうしてこちらに？」
「決まってるじゃない。担任として、君たちのフォローに来たのよ」
「サラ教官……」
　リィンたちがじんわりと感動を覚えていると、
『――まったくどこへ行ったのかね!?　バレスタイン教官は!?』
「あ、やばっ!?」
　男性の怒鳴り声の後、即座に教卓の裏に身を潜めるサラ。
　一瞬遅れて、教室内にノックの音が響く。
「は、はい！」
　トワが返事をすれば、「――失礼する」と一言断りながら、壮年の男性が扉を開けた。
　そこに立っていたのは、指紋一つない丸眼鏡とちょび髭が特徴的な、ここトールズ士官学院の教頭――ハインリッヒだった。

　ハインリッヒはいつもの神経質そうな瞳でトワの姿を確認すると、少し驚いたような表情を見せた。
「……む、君はトワ・ハーシェル君か。何故生徒会長の君がここに……と、まあそれはいい。それよりバレスタイン教官を見なかったかね？」
　問われたトワは、一瞬びくっと反応したものの、努めて冷静に状況を判断し、ハインリッヒに告げた。
「い、いえ、こちらには来ていませんが……」
「ふむ、そうか。ではもし見かけた場合は、即座に私まで伝えるように。よいかね？」
「は、はい。分かりました」
「うむ。では失礼する」
　どこか不遜げにそう言い残し、ハインリッヒは教室を去っていった。
　彼の気配が消えたことを確認したサラは、大きく一息吐き、腰を上げる。
「……まったくしつこいったらありゃしないわ。ありがとう、トワ。おかげで助かったわ」
「いえ、それはいいんですけど……」
「今度は一体何をしたんですか？」
　呆れ顔のマキアスにそう尋ねられたサラは、「失礼ね。それじゃあたしがいつも何かやってるみたいじゃない」と言い返すが、サラ以外の全員が「みたいというか、むしろやっているのでは……」と内心思っていた。

英雄伝説 閃の軌跡
〜メンタルクロスリンク〜

「ふん、大方酒でも飲んでいたところを見つかったのだろう」
「ち、違うわよ！　さすがのあたしでも、学院内では飲まないよう必死に我慢してるんだから！」
「まあそれは当然だと思うが……。では何故ハインリッヒ教頭に？」
　ラウラの問いに、サラは腕を組み、神妙な面持ちで口を開いた。
「話せば長くなるわ……」
「あの、出来れば短めでお願い出来ると……」とエマ。
「何よぅ。せっかくお姉さんが聞くも涙の冒険譚を語ってあげようと思ったのに……」
　子供っぽく頬を膨らませるサラだったが、切り替えは早いらしかった。
「まあそれは冗談として。実はとある生徒の親御さんから、いつもお世話になっているお礼にって、お酒を箱いっぱいもらっちゃってね。しぶしぶ他の教官方にもお裾分けをしようと運んでいたら、運悪く教頭に見つかっちゃったってわけ」
「なるほど。でもそれなら、きちんと事情を説明すれば、分かってもらえる気がするんですけど……」
「そこがあの教頭の面倒臭いところなのよね〜。もちろんあたしだってアリサの言うとおり、事情を説明したわよ。それはもう事細かくね。けれど、何故かあたしの私物だと言い張るのよ、あのちょび髭」

『……』

不満を熟々と垂れ流すサラに、普段の素行を知っている一同は、自業自得なのではなかろうかと思っていたが、それは心の中に留めておくことにした。

「つまり逃げてきたんですね？」

「まあそういうこと♪　でもフォローしに来たのも本当よ？」

サラはリィンの言葉に頷き、「さすがに元には戻せないけど」と前振りをした後、口の端を歪めて言った。

「あたしはね、どんな些細なことでも、意味のないことなんか一つもないと思ってるの。無責任な発言だと君たちは思うかもしれない。でもね、今は辛いかもしれないけど、それでもこうなったことには、きっと何かしらの〝意味〟があるはずよ。他人になれるなんて、通常では考えられない体験だしね」

『……』

聞き入る一同に、サラは「だから」と最後にこう言った。

「――きっと元に戻れるわ。もちろん確証なんてないわよ？　でもあたしはそう信じてる」

『――っ』

サラの言葉がリィンたちの胸に熱いものを込み上げさせる。

普段は頼りない残念美人の彼女ではあるが、ここぞという時は誰よりも頼りになる――それが〝サラ・バレスタイン〟という女性なのだ。

「じゃ、そういうことであたしは隠しておいたお酒を回収してくるから。もうこうなった以上、本当に残念だけど、あたし一人で飲むしかないわね。ふふ～ん♪」

『……』

鼻歌交じりに教室を後にするサラを見送りながら、リィンたちは今の感動は一体なんだったのかと揃って嘆息するのであった。

そうしてその後も精力的に話し合いは続けられたが、やはり現状では闇雲に手を出すわけにはいかないという結論に達し、シャロンの報告を待ちつつ、しばらくは様子を見ようということになった。

とはいえ、四六時中監視するわけにもいかず、かと言って、一人で行動し、万が一のことがあってはいけないと、入れ替わった両者はなるべく一緒に行動するという運びになり、リィンとアリサ、ラウラとフィーが、それぞれともに行動していた。

しかも《Ⅶ組》以外の生徒に知られるわけにもいかず、目立つ行為は避けるよう細心の注意を払いながらの行動ゆえ、逆にどこか辿々しい感じだった。

「しかし何と言うか、スカートというのはどうにも落ち着かないな……」

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

いつもより風通しのよくなった足元に、リィンは微妙な表情を浮かべる。

「まあ仕方ないわよ。私だってズボンなんて滅多に穿かないし。でもサラ教官の言ったとおり、なんだか新鮮な感じでもあるわ」

「そうだな。早く元に戻れるに越したことはないが、これも一つの経験として、きちんと受け入れることも大切なのかもしれない」

そんなことを話しながら、リィンたちは廊下を並んで歩く。

他の《Ⅶ組》メンバーも、それぞれ元に戻れる方法を探してくれている以上、自分たちだけが寮で待っているわけにもいかない。

そう考えたリィンたちは、何か方法がないものかと思案しつつ、ふとしたことからアイディアが見つかる場合も踏まえて、学内を散策していたのだ。

もちろん人前ではお互いに口調を変え、なるべく怪しまれないよう努めている。

と。

「――急げ！　急ぐのだ、サリファ！」

何やら慌ただしい様子で廊下を駆けてくる貴族生徒がいた。

傍らには涼しい顔で追走するメイド服姿の女性もいる。

「あれは……確か二年のヴィンセント先輩と、メイドのサリファさんだったか」

「ええ、フェリスのお兄さんだったわね。時々ラクロスの練習を見に来ていたような気がするわ――って、ああっ⁉」

突如声を張り上げたアリサに、リィンは「どうしたんだ？」と首を傾げる。

ちなみにアリサの言う〝フェリス〟とは、彼女と同じラクロス部に所属する貴族生徒で、良きライバル関係にある少女である。

「い、いえ、ちょっと思い出したことがあって……」

しかしアリサは苦虫を噛み潰したような顔で口ごもっていた。

何か言いづらいことでもあるのだろうか。

それならば無理に聞き出すのも失礼だろう。

リィンがそう思っていると、二人の姿に気づいたヴィンセントが足を止め、芝居がかった口調で語りかけてきた。

「やあ、二人とも。本当はこの〝歓談の貴公子〟ことヴィンセント・フロラルドが、得意の話術を披露したいところではあるのだが――」

「ヴィンセントさま。〝あの方〟の気配が凄まじい速さで近づいてきておりますが？」

「ひいっ⁉　そ、それはいかん！　で、ではさらばだ！」

言って、ヴィンセントとサリファは再び廊下を駆けていった。

「……な、なんだったのかしら？」
「さあ……。だが何かに追われているような感じだったな」
「ええ、そうね。〝あの方〟とか言っていたけれど……あら？」
　ヴィンセントたちが廊下の角を曲がったと同じタイミングで、今度は彼らを追うように、一人の女生徒が猪が如く姿を現した。
「あらぁん？　リィン君じゃなぁい」
「――っ!?」
　その逞しい足で速度を殺し、野太めの声音で口を開いたのは、貴族向けの制服が体型的な意味で悲鳴を上げている女生徒――マルガリータだった。
　以前ヴィンセントが偽名でラブレターをもらうということがあった際、リィンは彼からの依頼でラブレターの送り主捜しを手伝った。そして、言わずもがな、このマルガリータがその送り主だったのである。
　なお、その時に使われていた〝グランローゼ〟という偽名は、かつて彼女の実家であるドレスデン男爵家から、皇帝家に嫁いだ絶世の美女の名前だったという。
　危うく返事をしそうになってしまったリィンだったが、すんでのところでアリサに止められ、事なきを得る。
「や、やあ、マルガリータ。そんなに急いでどうしたんだ？」

「ムフフン、決まってるじゃなぁい。愛しのヴィンセントさまに手作りのクッキーをお届けするところなのよぉん♪」
　鼻息荒くそんなことを言う。
　ヴィンセントが慌てていた理由はこれか……、とリィンたちは揃って納得した。
　先ほどミリアムが帝都のレクターにクッキーを届けに行っていたが、やはりマルガリータも一緒にクッキーを作っていたのだろう。
　たとえ相手が誰であれ、せっかくの手作りなわけだし、受け取ってもいいとは思うが……。
　ちらっ、とリィンはマルガリータの手に握られた、リボン付きの小包を見やる。
　ぱっと見は、とても可愛らしい包装がされた小包である。
　恐らくは五個程度のクッキーが包まれているのであろう。
　しかし――。
「……」
　この言い知れぬ威圧感は一体なんなのか。
　何故たかがクッキーにこれほどの〝圧〟を感じるのか。
　心なしかあの小包の周囲だけ空間が歪んでいるようにも見える。
　――危険だ。
　何が危険なのかはよく分からないが、とにかくあれを食すのはあまりにも危険ということだ

けは分かる。

　本能がそう警告しているのだ。

　それはアリサも同じだったようで、彼女の顔色も青白くなっていた。

「と、とにかく廊下を走るのは危ないから……えっと……き、気をつけてくれ」

「ムフフ、ありがとぉん♪　そうよねぇ、ヴィンセントさまのものになる前に、この身を傷つけるわけにはいかないものねぇん♪」

「そ、そうだな……」

　アリサも若干引いている様子である。

「そうなのぉおおおん！　この身を傷つけていいのは、愛しのヴィンセントさまだけなのよぉおおおおん！」

　己が身体を両腕で抱き（クッキーの砕ける音がした）ながら、マルガリータは直前の忠告を忘れて再び大地を蹴った。

「ヴィンセントさまぁあああああん！　今行きますわぁああああああん！」

「……」

　そしてリィンたちは、その光景をただ眺めていることしか出来なかった。

　せめてヴィンセントが無事であるよう、微かな祈りを込めながら。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

　リィンたちがマルガリータと遭遇していた頃、彼らと同じく、ラウラたちもまた学院内を散策していた。

　とはいえ、向こうほど切羽詰まった感じではなく、二人ともどこか余裕を持っており、フィーにいたっては、中庭のベンチで再び昼寝をしているくらいだった。

　ただ普段と違うのは、そこに幾人もの女生徒たちが集まっているということだろうか。

　皆一様に黄色い声を上げ、顔を紅潮させている者たちがほとんどだった。

　何故なら、

「……はぁ。なんとお美しいお姿なのかしら……」

「ええ……。よもやあのラウラさまが、まさかこのようなところでお休みになられているなんて……」

　そう、他の者たちにはラウラにしか見えないからである。

　ラウラはその怜悧な容貌と、凛然とした佇まいから、男子よりもむしろ女子の支持を集めてしまっており、故郷であるレグラムや、帝都の聖アストライア女学院などには、彼女を〝お姉さま〟と慕う女子たちが多数存在している。

　いつも凛々しいラウラの貴重な寝姿が拝見出来ると聞けば、学院中から女生徒たちが集まってしまうのも当然の道理であろう。

　そんな最中に事件は起きる。

「――ですがまだ暖かいとはいえ、さすがに何もかけずにというのは、ラウラさまのお身体にも毒なのでは……？」

『――っ⁉』

この一言が女生徒たちの間に緊張感を走らせたのだ。

「そ、そうですわね。ではここは私がラウラさまを温めて……くっ⁉」

ぎゅっと手首を掴まれた女生徒は、掴んだ女生徒を睥睨する。

「あらあら、抜け駆けはよろしくないのではなくて……っ⁉」

掴む手と振りほどこうとする手がぎりぎりと摩擦を起こす。

彼女らだけではなく、他の女生徒たちも互いを牽制するように目配せしていた。

「でしたらこの私が……」と貴族の生徒が前に出れば、

「いえいえ、ここは私の方が……」と同じく貴族の生徒がさらに前に出て、

「いえ、私が……」と隙を突いてやはり貴族の生徒がラウラ（フィー）に手を伸ばせば、

「うふふふ……」と平民の生徒が身体を滑り込ませる。

『……』

沈黙。

『おほほほほほっ！』

身分を問わず、殺気立った笑顔を向け合う女生徒たちを尻目に、フィーは瞳を閉じながら思っていた。

……寝れない、と。

一方、当の本人であるラウラは、何やら激しい攻防を繰り広げている女生徒たちの様子を遠目に首を傾げつつ、園芸部の部長であるエーデルに視線を戻した。

エーデルはいつも麦わら帽子を被りながら花の面倒を見ている、柔らかい面持ちの女生徒である。

貴族クラス用の白い制服に身を包んではいるが、服の上からでも分かるほどスタイルがよく、物腰からも母性を感じさせていた。

「これがフィーの育てた花か」

「あら？　フィーちゃん、なんだかしゃべり方が変わりましたか？」

花壇を眺めながら自然と出てしまった言葉に、ラウラはしまったと臍を噛む。

「い、いや、そ、そんなことはない。私はいつもどおりのフィー・クラウゼルだ」

「ふふ、なんだかラウラさんみたいですよ。よほど仲がよろしいんですね」

おかしそうに微笑むエーデルに、ラウラは血の気が引いた思いだった。

（な、何故バレたのだ⁉　い、いや、落ち着け！　落ち着くのだ、ラウラ・S・アルゼイド！

この程度で心を乱してどうする？　落ち着いてフィーを演じきるのだ！）
　小さく呼吸を整え、ラウラは普段の自分と接しているフィーの記憶を呼び起こす。
「……ぶい」
　Vサインである。
（――って、何が〝ぶい〟なのだ!?　い、いや、確かによく〝ぶい〟とやってはくれるが、今この状況でやることなのだろうか……？　わ、分からぬ……）
　内心頭を抱えるラウラだが、エーデルは「はい」とやはり微笑み、
「ぶいです♪」
　同じくVサインを作ってくれた。
「お、おお……っ」
　それに感動を覚えたラウラは、自分のしたことは間違っていなかったと拳を握り、その後も自分の描くフィー像に従って、なんとかフィーを演じきったのであった。

　マルガリータの登場に調子を乱されたリィンたちだったが、今は落ち着きを取り戻し、校舎を出て、学院の敷地内を旧校舎方面へと歩いていた。
「しかしなかなかいいアイディアが浮かばないものだな」
「そ、そうね……」

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

「皆の方はどうだろうか？　何か見つかってくれればいいんだが……」
「ど、どうかしらね……」
「……」
「……」
　学生会館の前を通過した辺りで、先ほどからどこか焦燥を隠せない様子のアリサに、リィンは足を止め、思いきって尋ねてみることにした。
「なあ、アリサ」
「な、何かしら？」
「その……何か気になることでもあるのか？」
「えっ!?　べ、別に何もないわよ？」
　あからさまに動揺するアリサに、リィンも苦笑いを浮かべる。
「いや、たぶん何か事情があるとは思うんだが……。よかったら話してくれないか？　もしかしたら力になれるかもしれないし」
「……」
　リィンにそう促されたアリサは、困ったように視線を泳がせた後、ついに観念したのか、自分を納得させるように小さく頷き、「あ、あのね……」と語り始めた。
「その、こんなことをしている場合じゃないのは分かっているの。でも以前から約束していた

ことだから……」

「つまり〝アリサ〟として、俺に何かして欲しいことがあるんだな？」

「……ええ」

　申し訳なさそうに首肯するアリサに、リィンは口元を緩める。

「気にすることはないさ。確かに大変な状況ではあるけど、これも意味のあることだってサラ教官も言ってただろ？　実際俺もサラ教官の言葉を聞いて、そう思えるようになった。だからこの状況で俺に出来ることがあるなら、是非任せて欲しい」

「リィン……」

　まなじりにうっすらと涙を浮かべるアリサに、リィンは力強く頷いた。

「……ありがとう。じゃあ悪いけどお願いするわ」

「ああ、任せてくれ。それで何をすればいいんだ？」

「ええ、実はさっきフェリスのお兄さんを見かけた時に思い出したのだけれど……」

「そういえば、何か驚いていた様子だったな」

「ええ。実はフェリスと日頃の成果を競うために、ラクロスの練習試合をする約束をしていたの」

「なるほど。つまりそれに出ればいいんだな？」

「そういうことになるわ。ただ私自身じゃないのが、フェリスには申し訳ない限りなのだけれど……」

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

　しゅん、と下を向いてしまったアリサの頭を、リィンは少しだけ背伸びしながら、優しく撫でる。

「あっ……」

「仕方ないさ。だがその代わりと言ってはなんだが、俺も全力で相手をさせてもらうよ」

「リィン……。ありがとう……」

「ああ」

　微笑むリィンに、アリサも笑顔を取り戻す。

「とりあえずルールについては、後で教えてもらっていいか？」

「ええ。それについては任せて頂戴」

「ああ、頼む。じゃあ早速着替えてくるから、ちょっと待っていてくれ」

「ええ、分かったわ――って、ちょっと待って!?」

「……うん？」

　寮に戻ろうとしたリィンは、どうしたのかと眉根を寄せた。

「なんだ？」

「なんだじゃないわよ!?　あなた、まさか着替えるつもりじゃないでしょうね!?」

「ああ、そのつもりだが……」

　しれっとさも当然だと言うリィンに、アリサは驚愕の表情を浮かべた。

「ど、どどどういうつもりよ⁉」

「いや、どういうつもりも何もユニフォームに着替えるんだが……。いつもユニフォームで練習していただろ？」

「そ、そうじゃなくて！　私が言いたいのは、あなたが〝私の身体で着替えるのか〟ってことよ⁉」

「えっ……あっ！」

　そこまで言ってやっと気づいたらしく、リィンは慌てて弁解した。

「ち、違うんだ。俺はただ純粋に着替えようとだな……」

「や、やっぱりあなた……」

　己が身体を抱きながらジト目を向けてくるアリサに、リィンはどう説明したらよいものかと頭を抱えつつ、同時に女の子っぽく恥じらう自分の姿が、思った以上に気持ち悪いことにもショックを受けていた。

「……分かった。じゃあ着替えに関しては、俺は目を隠しておくから、アリサがやってくれ。それなら問題ないだろ？」

「えっ……。で、でもそれって、つまり〝リィンには見られる〟ってことよね？」

「いや、まあ身体だけで言うならそうかもしれないが、でも俺の意識はこっちにあるからな」

「で、でも見られることに変わりはないでしょ⁉　そ、それは駄目！　絶対駄目！」

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

　気持ちは分からなくないが、断固として拒否するアリサに、リィンも「参ったな……」と頭を掻いていた。

と。

「――話は聞かせてもらったぜ！」

　どこからともなく軽快な声が飛び込んできた。

「えっ？」

　二人が振り向いてみると、そこには不敵な笑みを浮かべながら腕を組んで佇む、一人の男子生徒の姿があった。

　額に巻いたバンダナと、だらしなく着崩した平民用の制服が特徴的な学院生――クロウ・アームブラスト。

　帝都ヘイムダルに〝絶対に外せない競馬のレース〟を見届けるために向かったはずの、《Ⅶ組》メンバーの一人だった。

「クロウ⁉」

　驚くリィンに、クロウは「よっ」と手を上げながら近づいてきた。

「帝都に行ったんじゃなかったのか？」

「もちろん行ったさ。まあ結果は聞いてくれるな……」
がっくりと消沈するクロウに、リィンたちは全てを悟る。
以前も大負けしていたのだが、どうやら今回も同様の結果に見舞われたようだった。
「しっかし本当に入れ替わっちまったんだな。トワから話は聞いていたが、こうして実際に会ってみると、嫌でも信じざるを得ないぜ」
観察するように二人を見比べ、クロウはやれやれと嘆息する。
「まあそいつはいいか。とにかく今はアリサの試合についてだろ？」
「え、ええ、そうなの。その、着替えをどうするかで悩んでいて……」
「ああ、知ってる。あれだけ大声で叫んでりゃな」
「～～っ!?」
言われてアリサの顔がみるみる赤くなっていく。
してやったりといった表情のクロウは、リィンたちに「だから言っただろ？〝話は聞かせてもらった〟ってな」と得意げに告げた。
「クロウ、もしかして何か解決策があるのか？」
「もちろんだぜ。俺さまを誰だと思ってやがる？」
ぐっと自分を指差すクロウに、一応先輩であることを忘れていたリィンたちは、改めてそれを思い出す。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

先ほどトワも言っていたが、なんだかんだ言いつつも、クロウは面倒見の良い性格であり、ここぞという時には頼りになる、兄貴分的な存在なのだ。
そんなクロウには、リィンたちも幾度となく助けられているので、どんな解決策が出てくるかと、固唾を飲んで見守っていると、クロウは腰に手をあて、声高らかに言い放った。
「リィンが一人でやるのは駄目、アリサが手伝うのも駄目となりゃ方法はもうこれしかねえだろ？

――そう、この俺が着替えさせればいいってワケだっ！」

「……」
重い沈黙とともに冷たい風が吹き抜ける。
自信満々に言い切ったクロウが再びリィンたちに視線を戻すと、
「――」
「うおっ!?」
眼光だけで魔獣を射殺せるのではというアリサの威圧感に、堪らずクロウは身を竦ませた。
「リィン、行きましょう」
「あ、ああ……」
笑顔だが目の笑っていないアリサにそう促されたリィンは、ただ頷くことしか出来なかった。



「じゃ、じゃあクロウ……また後で」
「お、おう……」
そしてクロウも、寮へと向かう二人の背姿を見送ることしか出来ず、徐々に小さくなっていく背に向けて、こう独りごちるのだった。
「はは、ちょっと冗談が過ぎちまったかな……。まあ後はリィンのやつに任せるとするか……」

クロウと別れたリィンたちは、寮への道を急いでいた。
「まったく、クロウったら……ぶつぶつ……」
当然、アリサの口からは止めどなく悪態が流れ続けていた。
「まあクロウもそんなに悪気があったわけじゃ……」とクロウを擁護するリィンだったが――
じろりっ。
「い、いや、なんでもない……」
アリサに半眼を向けられ、大人しく口をつぐんだ。
寮の扉を開けたアリサは、シャロンが戻ってきていることを期待していたのだが、寮内に彼女の姿はなく、仕方ないとそのまま自身の部屋へ向かう。
壁に掛けておいたラクロスのユニフォームをベッドの上に置き、アリサはリィンの顔に布で目隠しをした。

「こうなったらもう仕方がないわ。試合まで時間もないし、お互いに目隠しをした状態で着替えましょう」
「あ、ああ。アリサがそれでいいなら俺は構わないが」
「ええ。じゃあ私も目隠しするから、あなたは私の指示どおりにして頂戴」
「分かった」
　アリサが目隠しする音を耳朶で受けつつ、リィンは立ったままで、アリサの指示を待っていた。
「それじゃまずは上からね。私が上を脱がせるから、リィンは流れに身を任せて」
「ああ」
「えっと、まずはボタンを外して……」
　——ふにゅ。
　むにゅむにゅ。
「あら？　これは何かしら？」
「えっと……アリサ？」
「何？　今忙しいのだけれど？」
「いや、非常に言いにくいんだが……そこは〝胸〟だ」
「えっ？　え、ええっ!?　な、なんてものを触らせてくれたのよ!?」

英雄伝説 閃の軌跡
〜メンタルクロスリンク〜

「い、いや、俺はただアリサの指示どおりにしていただけなんだが……」
「と、とにかく！　そういうことはもっと早く言って頂戴！」
「あ、ああ……」
　語気強めに念押しされ、リィンもしぶしぶ頷く。
　それからなんとかボタンを外すことに成功したアリサは、リィンの協力を得て上着を脱ぐことにも成功する。
　次いで肌着を脱ぐことになったのだが、これは上から被るものゆえ、アリサが持ち上げ、リィンが両腕を上げる——いわゆる〝万歳ポーズ〟になる必要があった。
「よし、いいぞ」
「分かったわ」
　リィンが両腕を上げたことを伝えると、アリサは肌着の下からゆっくりとそれを持ち上げ始める。
「お、いい調子だ」
「そ、そう？　じゃあこのまま上まで引っ張ってっと」
　——ふぁさっ。
「よし、脱げた——って、うん？」
　心なしか顔が涼しくなった感触を覚えたリィンは、自らの顔に手を当てる。

「どうしたの？」

「あ、いや……」

　きめ細かな肌の質感が指全体に広がり、しかし何かが足りないことに気づく。

　恐る恐る瞳を開けると、そこには目隠ししたままこちらを見ている自分の姿があった。

「あっ……」

　そう、自分の姿が〝見えている〟のである。

　恐らくは先ほど肌着を脱いだ時、目隠しも一緒に取れてしまったのだろう。

　慌てて目隠しを探そうとするリィンだったが、下を向いた際、視界の中に入ってくる二つの丘に気づいてしまった。

　その白桃のような丘は、肌着とはまた違った色彩の桃色に包まれ、存在感をこれでもかとアピールしていた。

「あ、こ、これはその……」

　誰に言うわけでもなく、自然と弁明の言葉が出てしまったリィンに、いよいよ何かがおかしいと感じたアリサは、「ま、まさか!?」と目隠しを剥ぎ取った。

「～～っ!?」

「ち、ちち違うんだ!?　こ、これは誤解なんだ!?　さっき肌着を脱いだ時に――」

　そこまで説明した時、室内には清々しいほど乾いた音がスパンッと鳴り響いた。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

　余談だが、後日この時の話を《Ⅶ組》の女子たちにした際、「それならば、私やフィー、エマ、もしくはトワ会長に声をかければよかったのではないか？」とラウラに言われ、アリサは真の意味で真っ白に燃え尽きたとかなんとか。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.58

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち／石橋青大／金田悠未
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

今月のプレゼントはこちら!!



① 1名様

❶『東京ザナドゥ』サイン色紙セット
ソラ役 加隈亜衣&ユウキ役 山下大輝

先月に続き、『東京ザナドゥ』発売記念プレゼントは可愛い（？）後輩ペアが登場！　合わせて飾って楽しんでください♪

② 1名様

❷タウン情報誌『立川ザナドゥ』

９月に発行されたスペシャルなコラボ情報誌、ゲットできなかった人はこれが最後のチャンス!?　聖地巡礼にもお役立ちです！

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

宛先：
件名：vol.58プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白い→
　つまらない→
　（記事一覧から1つずつ）
3：①
　②
　（はい・いいえ／作品名）
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

【記事一覧】

1：東京ザナドゥ 最新情報
2：英雄伝説 空の軌跡SC Evolution最新情報
3：みんな集まれ！ファルコム学園
4：英雄伝説 閃の軌跡
5：エステル＆ヨシュアのファルコム空の軌跡ラジオ
6：ファルコムニュース

アンケート

①1年に何冊漫画の単行本を買いますか？
②『東京ザナドゥ』の中で好きなキャラは誰ですか？

特設サイトからも応募ができます!
http://www.field-y.co.jp/root/index.php/falmagap

宛先はこちら→ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り 12月21日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。